

見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち



April						
S	M	T	W	T	F	S
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

April 2024 vol.120

◆ 常光寺

所在地：田原市堀切町

交通：豊鉄バス「堀切」停西約700m

過去の災害の様相を知る上では、当時の被害の報告や救済の申し立て、神社や寺院などで書き残された記録、個人の手紙など、様々な歴史資料に残された被害の記録が貴重な手がかりとなります。常光寺に伝わる『常光寺年代記』は、災害による被害の記録が含まれる歴史資料のひとつです。

常光寺は、応仁2(1468)年開山の曹洞宗の寺院で、堀切を始め、神島・答志島などを含め31の末寺をもつ中核寺院でした。創建当時は、渥美半島の海岸線近くに海路を経て伊勢へと通じる伊勢街道が通っており、現在より海岸線に近い、伊勢街道沿いに立地していました。常光寺年代記は、常光寺建立後は、代々の住職が天下の出来事とともに常光寺周辺の出来事を書き継いだものとなっており、今回はここから、南海トラフの地震に関する記述を紹介します。

明応7(1498)年明応地震：「八月廿五日辰剋大地震地破同時大海嘯満来諸国湊浦々津人家倒死」(大地震により地割れが起き、大津波が押し寄せた。諸国で港や海岸の家が倒れ、死者が出た。)地震と津波により、港や漁村の家々に被害が出た、深刻な事態であったことがうかがえます。

慶長9(1605)年慶長地震：「雪月十六日夜ノ五ツ時分ニナイシシツ打片濱之船皆打破也アミナカスナリ人知不アスミテ驚ナリ」(午後8時頃に地震があり、浜の船が全て破壊され、網が流された。皆気づかず、翌日見て驚いた。)地震には気づいたが夜の時点では被害はなく、翌日になり船が流され漁網が流失したことに気づいた様子がわかります。

宝永4(1707)年宝永地震：「十月四日午時大地震近代未聞ノ地震ナリ當濱津波挙リ十三里間ノ漁船盡ク流損シー村ニテ一人宛流死ス當村西ニテ民屋三十餘浪ニテ破損シ人二人流死ス此ノ日夜ニ至テ三四十度ノ地震故郷内ノ老若コトコトク城山ア別退キ二日三夜野ニ臥ス(抜粹)」(大地震で津波が押し寄せ漁船が流され破損し、各村で1人2人の流死者が出た。堀切村西でも民家30軒余りが破損、2人流死した。夜までに3,40回地震があり、村の住民は城山に避難し、2日3夜野宿した。)宝永地震では、堀切や近隣の集落でも大きな被害が発生しており、地震の様子や被害の詳細な記録があります。常光寺は宝永地震後の天保年間に内陸の現在地に移転しました。(移転の理由は諸説あります。)

嘉永7(1854)年安政東海地震：「寅十一月四日大地震一時間二大津浪在家者平常江小屋之住也當寺方米湯施ス又米三合宛施」(大地震により一時間(約2時間)に大津波が襲い、家に居た者は避難し小屋住まいとなり、常光寺から米等を施した。)安政東海地震については、津波襲来時に住民が高台に避難する様子が語り継がれるなど、過去の津波被害の教訓が活かされていたとされ、被害の記録も少なくなっています。現在の住職のお話によれば、常光寺では山門まで津波が到達したとのことで、記録にもあるように、寺へ避難してきた住民に食べ物を用意していました。

このように、当時の状況が克明に記録された常光寺年代記は、同一地点の長期間の地震の記録として貴重で、南海トラフで発生した地震の様相を知るための重要な手がかりとして利用されています。(裏面に続く)



常光寺

◆ 災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い(二度と被害を繰り返さないように、など)が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

ところで、こうした災害の記録は、実際に災害に遭遇し、災害を肌で感じた当時の人々が、様々な目的や思いから書き残したもので、今日、私たちがその内容を受け取り、日々の防災につなげていくことができるものであるはずです。『歴史の中の東海地震・リアル』（藤田佳久著、愛知大学総合郷土研究所ブックレット）は、被害の記録を書き残した当時の人々を現代に呼び寄せ、司会進行役である著者との掛け合いによりその内容を現代口調で語ってもらう、読者にリアルに感じてもらう、画期的な構成となっています。

ここでは、常光寺年代記を書いた常光寺の住職も現代に呼ばれ、例えば、宝永地震については、「今まで経験したこともないとても巨大な地震だった。それに大津波も押し入り、海岸十三里にわたって漁船はすべて流失、多くの漁村でそれぞれ一人、二人が流され死んだ。この日は夜にかけて四十回も揺れた。だからわしの村では老いも若きもみな城山へのがれ、二日、三日と夜営したよ。ほかの村の連中もほとんど家がつぶされたため、みんな野に臥したり、山中で過ごした。（抜粋）」と語っています。

★おんぞまつり（御衣祭）

三河地方で取れた蚕糸を織って伊勢神宮のおんぞ料に献じたのが始まりとされるおんぞまつりは、長い歴史のある祭で、4月の第3日曜日が祭礼日です（2024年は4月21日）。昭和42（1967）年までは、旧暦4月14日、伊勢神宮で神御衣祭かんみそさいが行われる日に開催されていました。

おんぞまつりが行われる伊良湖神社周辺は、古くから伊勢神宮領伊良湖御厨みくりやであったため伊勢神宮と縁が深く、外宮から禰宜が来て神事を執り行っていました。当日は、午前11時からご祈禱が行われるほか、御朱印の配布、漁夫歌人・糟谷磯丸の供養祭などが行われます。参道にはたくさんの屋台が出店し、地元の人々に加え、伊良湖を訪れた観光客や参拝者で大いに賑わいます。



渥美半島観光ビューローHPより

著者は、「歴史的な大震災や津波被害の研究では、震災に関する各事項の数量（建物倒壊数・死者数など）は明らかにされるが、生身の人々の被災状況や震災認識、対応行動などの震災のリアル感が欠如していることが気になった。」「東北大震災の映像に映し出される圧倒的な津波のインパクトとその中で被災する人々のリアル感が伝わってこないことへの不満足感を感じ、歴史的な震災の「リアル」を知ってもらうために、時空間を越えて、地震を体験し、経験して筆を執り、記録に留めた人々を現在に招いて、現在の言葉で語ってもらうことを試みた。」としており、読み手に「リアル」が伝わる一冊となっています。

「見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち」では、今号で10年、碑や史跡を中心に、過去の災害にまつわる各地の記録を紹介してきました。当時の人々が肌で感じて書き留めた記録、様々な思いを込めて建設した慰霊碑や施設、自然そのものを保存した史跡などから、あらためて災害のリアルを感じていただき、日々の防災につなげていくための貴重な財産として活用いただければ幸いです。

～フェリーで辿る～

海のバイパス・伊勢湾フェリーは、田原市の伊良湖岬と三重県鳥羽市を55分で結びます。雄大な海を眺めながらの船旅は爽快で、イルカやスナメリに遭遇することもあります。



Aichi Now HPより

国道42号、259号の海上区間に指定されており、伊勢街道の雰囲気も味わうことができます。2024年4月4日には創立60周年を迎え、記念イベントとして全便旅客運賃無料Dayなどのイベントが開催されます。

●ブレイクタイム●

♪ 休暇村伊良湖

渥美半島の先端、伊良湖岬に立地する休暇村伊良湖は、キャンプ場、コテージなどの宿泊施設や、体育館、グラウンドゴルフ場などのスポーツ施設を備えた、本格的なシーサイドリゾートで、三河湾や伊勢湾で獲れる新鮮な魚介類や、渥美半島で育まれた旬の野菜を使ったビュッフェ、伊良湖漁港水揚げの伊勢海老などの天然素材を用いた会席料理が自慢です。メロン狩りやイチゴ狩りをセットにしたプランや、伊勢湾フェリーの乗船券付きプランなども用意されています。



渥美半島観光ビューローHPより

◆この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災とSeeing』のホームページ（<https://www.saitoseeing2020.jp/>）をぜひご覧ください。

（発行：減齋の会・名古屋大学減災連携研究センター 2024年4月）